厚木市史たより 第5号

平成24年4月1日

題字は渡辺崋山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

七沢六夜祭告知ポスター（大竹遥拝所）

七沢足ヶ久保浅間山鳥居場（鐘ヶ嶽一丁目）
（撮影日　平成24年1月26日）

七沢の〝ロクヤサン〟

今年も一月二十六日に、市内西部に鎮座する七沢神社の祭礼の一つ、六夜祭が執り行われました。地元では「ロクヤサン」と呼ばれ、昔から親しまれている縁日です。浅間神社がある鐘ヶ嶽（浅間山）に通ずる七沢中沢地区の路地には、縁起物のダルマや輪投げの店、たこ焼・じゃがバター・焼き鳥・大判焼・綿菓子などを売る露店が並びました（写真中央）。

大正十四年（一九二五）に刊行された『愛甲郡制誌』の「玉川村」「七沢神社」の項には「大祭は九月二十六日此の外六夜祿（祿）と称して一の六夜の一月二十六日、二の六夜の二月二十六日、三の六夜の三月二十六日には老若男女の近郷近在より養蚕加護の祈祷に登山するもの多く山麓字中沢の如きは露店軒を連ねてさながら市場の観を呈する。」との記述があります。

一世紀前のロクヤサンに集う人は、七沢浅間神社が鎮座する険しい鐘ヶ嶽山頂を目指す参詣人で占められていたのです。山頂から人々が連なり、麓での縁日は、さぞ賑やかなことであったでしょう。今でも参道に佇む丁石などの石造物がそれを物語っています。

今日のロクヤサンに、かつて栄えた養蚕の面影を偲ぶことはむずかしくなってきました。これからもその時代とともに伝わってほしいと願います。そして、この伝統ある祭りを支えてきた地域の人々や関係者に敬意を表します。

（厚木市史編さん嘱託員　石川鹿奈子）

新しく生み出される民俗

厚木市史編集委員会民俗編部会
部会長　落合 清春

私の専攻は、日本民俗学、中でも口承文芸です。口承文芸といっても聞きなれない方もいらっしゃることでしょうから、少し説明します。まず口承とは、「ひとびとが口から口へと（伝説などを）つたえること」であり、口承文芸は「伝説・民話など」となります。では民話とは何かというと、「（主として）いなかのひとびとの間に語り伝えられてきた昔ばなし」（以上『三省堂国語辞典』）とありますので、昔話をイメージすれば大筋は間違っていないでしょう。昔話は、①動物を主人公とする動物昔話 ②人間を主人公とする本格昔話 ③人または動物の愚行・ユーモアを主題とする笑い話に分かれています。笑い話は、さらに「大話（おおばなし）」「まねそこない話」「愚か村（もの）話」に分かれます。

では、ここで、「愚か村（もの）話」を二つ紹介しましょう。

＜嬶見せ所＞

田舎のあわて者が大阪見物に行くと、「かがみみせ」という看板がありました。鏡店を嬶見せ屋と読んで感心して覗くと、きれいな女が座っています。村へ帰ってその話をすると、自分もその女が見たいという男があって、大阪へ行って探しましたが見つかりません。そのうち、「ことしゃみせん」という看板を見つけた男は、今年ゃ見せんそうなといって帰ったとか。

＜尼裁判＞

父親が上方見物に行き、鏡を土産に買ってきます。娘が鏡を見て、美しい女を連れてきたと言います。女房は同じく鏡を見て、年増女を連れてきたと怒りました。最後に尼さんが来て、鏡を見るや、娘も年増女もこのとおり尼になったと教えました。

これらは、全国的に有名な愚か村話です。愚か村話というのは、僻村に住む人々のあまりにも世間知らずなことを笑いの種にするというもので、江戸時代の後半、都会に住む知識人達が僻村の暮らしに興味を持つようになるにしたがって生み出されてきた笑い話だといわれています。

ところで、先に述べたように、「愚か村（もの）話」が笑い話の一種で、かつ昔話の一つのジャンルだということになると、起源を昔に設定することになりがちですが、よく考えてみれば、昔話も作られた当初は現在の話だったわけで、私達が生きている今このときに生み出されている笑い話・愚かもの話についても研究の対象としてよいのではないでしょうか。

そこで、次にこの地域「厚木・愛甲地区」の比較的最近（戦後）の愚かもの話を二つご紹介しようと思います。

＜相模湖は海？＞

荻野のあるおばあさんの話です。おばあさんは、人に連れられて、相模湖に遊びにいったそうです。初めて相模湖を見たおばあさんは、大変びっくりして言いました。「まあ、海は広い広いと聞いていたが、こんなに広いとは思わなかった！」

＜たった今、売り切れました＞

宮ヶ瀬のあるおばあさんの話です。昭和二十年代終りから三十年代初めの頃の話。宮ヶ瀬には夏になると大勢の観光客がやってくるようになりました。そこで婦人会が

観光客相手に飲み物や軽食を出すお店を川原に出したそうです。

その日は、婦人会の奥さん達に混じって一人のおばあさんが店番をしていました。お客さんがやってきて、おばあさんに聞きました。

「すみませんが、トイレはありますか？」おばあさんは、しばらく考えていましたが、待たしても悪いと思って答えました。「あいすみません、さっきまであったんですが、たった今売り切れました。」

林座による相模人形芝居（依知小学校での郷土芸能普及公演）
郷土に伝わる民俗芸能を子供たちに継承する取り組みが行われています。

いかがでしょうか。たしかに知識のないことは恥ずかしいことかもしれませんが、人をホッとさせるような、なんともいえぬユーモアが、これらの話の底にゆったりと流れているような気がしませんか。

私達の祖先もそして私達も、こういった笑い話を継承しながら、また一方で生み出しながらたくましく生きてきた、それが私達の歴史です。今回は口承文芸（その中でも笑い話）に的を絞ってご紹介しましたが、厚木市には、このほか、衣・食・住・生業・信仰・祭礼・芸能等多くの貴重な民俗文化が残されています。それらについての調査・整理作業が始まっており、その成果は今後『厚木市史』民俗編として刊行される予定です。写真や図を多く収録し、読みやすく楽しい内容のものにしようと考えています。また、他市町村の民俗編を見ると、古くから伝承されてきたものをそのまま記録して終わりという形が多いのですが、この『厚木市史』民俗編では、民俗的事象を継承しよう、再生しよう、さらには創造しようという試みを取り上げる企画が進んでいます。つまり未来志向の民俗編と言ったらいいでしょうか。従来の民俗編と一味違ったものとなることでしょう。どうぞご期待ください。

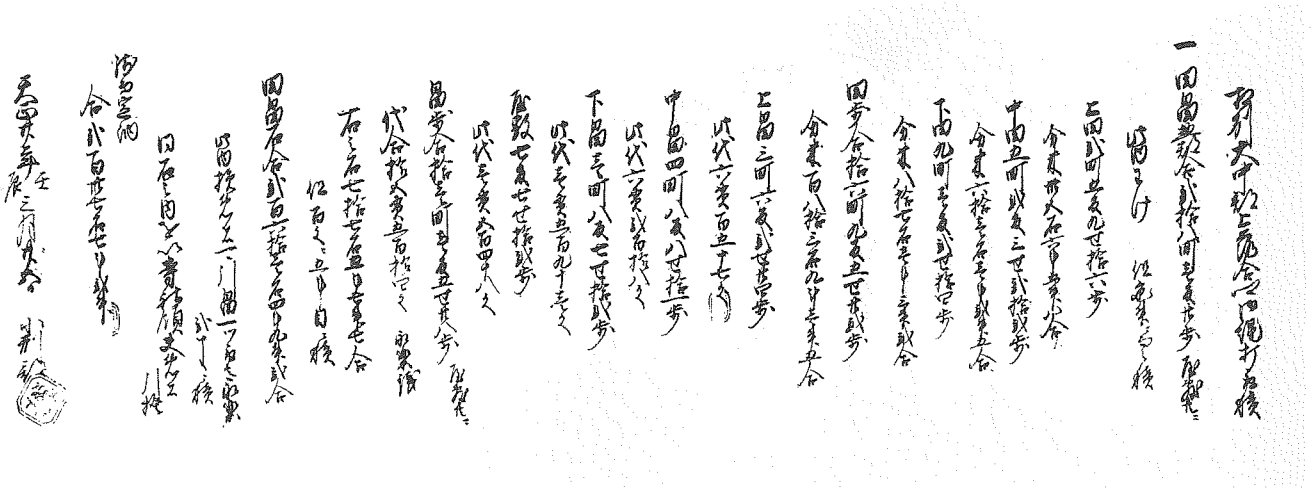
近世資料編を読むために(3)
―一番古い年貢関係文書など―

厚木市史編集委員会近世編部会
部会長　神崎　彰利

最近税金の申告時期だったからと言うわけではないのですが、今回は近世の年貢について少しふれてみました。

何時の時代でも、領主の最大の関心は領内から如何に年貢を取るか、と言うことでしょう。そこでまず、近世資料編に収録した年貢関係文書を通覧し、ここでその二、三の感想めいたことを紹介します。

その一つは、小稿の題名にした現存文書の中で一番古い年貢関係文書からです。これは『近世資料編(2)』25頁に収めた天正二十年（一五九二）三月「大中郡上落合郷検地目録」です（次頁写真）。周知のように、徳川家康が関東へ入国したのは天正十八年八月一日ですから、この文書はそれから一年八か月後に当たります。正規の文書名は「相州大中郡上落合郷御縄打取積」と称し、徳川氏の代官頭彦坂小刑部元正が上落合村に検地を実施し、その結果を一紙にまとめたもので、水田の等級別面積とその分米（生産高）、畠の等級別面積とその代永（年貢銭）等を記しています。これは他の代官頭＝伊奈忠次・長谷川長綱・大久保長安等にはみられない、彦坂元正独自の仕法です。



天正20年（1592）3月 大中郡上落合郷検地目録 『厚木市史』近世資料編（2）村落1 口絵・25頁（本文）所収
縦 29.5× 横 101.0 ㎝ （萩原 宏氏蔵）

この目録によると、年貢は田方米納、畑方銭納、使用枡は京枡、損免＝年貢免除分、夫免＝夫役（労働力）奉仕代償に村高（村の全生産高）の一割が年貢免除、等々が既にこの時期に確認されます。また石高と永楽銭との換算が永一〇〇文＝米五斗となっています。全体として、徳川氏の年貢徴収がこのようにして始まったといえるでしょう。現在、神奈川県内に同系の文書は僅か四点のみです。

右の検地目録は当時の徳川氏の直轄領＝御蔵入地、後の幕府領の実例ですが、周知のようにこの後市域は広範な旗本領となります。そこで旗本領の年貢関係文書ですが、その最も古いのは寛永九年（一六三二）七月、五〇〇石の旗本三浦正之が発給した「上落合村・下津古久村年貢高書上」（『近世資料編(2)』32頁）です。この文書は、二か村内に分給で存在する知行地の年貢を一紙にまとめて割付けるという、県内では他に例の無い唯一の割付状であり、少し説明を必要としますが、小稿の紙数の関係上ここでは全く省略し、通史で詳述します。

最後にもう一つ特異な事例の紹介です。時代は少し下がりますが、元禄十年（一六九七）温水村渡辺領の年貢です。この時期温水村は五給の村で渡辺領は一五九石ですが、この知行高に対して領民は「土免」として七八石余の年貢を上納しています（『近世資料編(2)』586頁ほか）。ここでいう土免とは、領主と領民が相対で年貢高を確定することで、領主の権力による年貢確定ではありません。県内では二例が確認できますが、渡辺領はその一つであり、このあたりのこともまた後日詳述する予定です。

既刊厚木市史一覧

	価格
厚木市史 地形地質編・原始編	6000円
厚木市史 古代資料編(1)	5700
厚木市史 古代資料編(2)	7140
厚木市史 中世資料編	5700
厚木市史 中世通史編	6130
厚木市史 近世資料編(1)社寺	5600
厚木市史 近世資料編(2)村落1	5700
厚木市史 近世資料編(3)文化文芸	2490
厚木市史 近世資料編(4)村落2	3570
厚木市史 近世資料編(5)村落3・荻野山中藩	2690
厚木市史 近世資料編(6)村むらと生活	6710

＊厚木市役所市政情報コーナー・郷土資料館にて発売中

厚木市史たより 第五号

平成24年4月1日発行
編集 厚木市教育委員会文化財保護課
発行 厚木市
住所 神奈川県厚木市中町3-17-17
電話 〇四六-二二五-二〇六〇
FAX 〇四六-二二三-〇〇八六

「厚木市史だより」は厚木市ホームページにも掲載しております。